骨肉

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
骨肉

【Ｎコード】
Ｎ９８１３Ｌ

【作者名】
きみよし藪太

【あらすじ】
月の歪な夜に。
わたしはあなたを想いながら別の男に抱かれます。
愛していないなら、いっそ噛み殺して欲しいのに。
あなたは意地悪を言うの、君が喜ぶことなんてしてやらないと。
別の男と寝る罪悪感はありません。
ただ、あなたを想えばこんなにも。胸が痛い。

十二番目の月なのか、それとも十三番目なのかは知りません。
ただ、今日のそれはひどく低い位置に、大きく、膨れ上がった奇妙に醜悪な欲望に似て、空に有りました。
川縁を、車の助手席に乗せられて走っていたのですが、吐き気がするほど恋しい人の車ではなかったので当然狂おしいほど身体が求めている愛しい匂いは欠片もせずに、わたしはただつまらなくその蜂蜜を垂らし続けているようなさらさらと流れる水の流れを眺めていたのです。どうして同じ煙草でも、吸う人によって香りが変わるのでしょうね、香水と一緒でしょうか、その人の体温やら体臭、意識と感覚で違えてくるものなのでしょうか。
たらりたらりと流れる、月の光をねっとりと織り込む川の流れは官能的で、それでもわたしはひとつとして欲情もしないまま男の車の助手席に乗っているのです。長い髪は縛りもせずに、少し気になる頬骨を隠しているのですがそうするとべったりと塗り付けた口紅の重たい唇に一本、二本、もしくは三本ほど時折張り付いてしまうので、指先で面倒臭げに取り払うのです。咳をする時と同様に、口元へ運ばれる白い手から香る、柑橘と炭酸を混ぜたような空気が。
愛し過ぎて意義さえ分からなくなってしまった愛しい人の、顔を思い出そうとしてもがいていると、勘違いをした隣の席から声がかかりました。
あなたじゃないのよ、と言ってあげても理解してくれないでしょうから、月がね、と代わりに言い訳をするのです。
「月がね、大きくて甘そうなの」
嘘です、月が甘い筈はないのですから、あれはひどく冷たい、薄荷の味がするだけです。
可愛らしい事を言うものだ、とまたしても勘違いの返事がきますので、わたしはにっこりと微笑むのです、愛しい人にはけして見せ

た事のない、愛想と蜂蜜で捏ね繰り回したような笑顔を。もちろん、見えない事は承知です、前を向いて走ってもらわないと困るから、まさか心中するつもりは針の先程もないのです、死んでまで誰かと一緒に居ても結局どうしてもひとりだなんて認識したい筈がないでしょう。

何がしたいの、なんて聞かれたって。

「噛まれたいわ、うんと。うんと沢山噛まれたいわ、歯形が残るだけじゃ駄目、肉を食い千切るぐらいよ、骨を噛み砕くぐらいよ」

痛そうなのは御免だ、なんて言う意気地の無さに笑います、女ひとり噛み殺せない男なんて。要らない、そんなものは少なくとも、わたしには必要が無い。

煙草の匂いが薄れると、車の中は甘ったるい香りがしました。熟れすぎた桃のような、それをもっともっと人工的にしすぎたような。男が用意したのでしょう、芳香剤のようなものを。もしかすると香水なのかもしれません、わたしは香水をつける男が大嫌いなのです、自分自身の匂いで勝負もできない者などただの臆病者ですから。吐き気まで催しそうな香りは気になるとどこまでも気になりだします。鼻からだけではなく、肌の呼吸からもその甘すぎる桃の香りが身体中を侵して具合が悪くなりそうです。

「少し窓を開けてもいいかしら」

返事は待たないまま細く窓を開けました。それから思い立って、全部開けます、十一月の夜風は冷たく、川の近くなので尚更なのでしょう、びょおびょおと凶暴な音を立ててわたしの耳を満たし、車内の温度をさらって行きます。

「なに、」

男が何か言ったようなのですが、風の音で聞こえませんでした。聞き返したので更に相手の声は大きくなったのですが、聞きたくもなかったせいでしょうか、意味のない音として耳に届くだけです。

「――、」

わたしは唇の形だけであの人の名前をなぞります。隣で運転中の

男とは比べ物にならない、わたしの愛しい愛しい人。口にすれば苦しくなるので、風がさらってくれればいいと思うのですが上手くいかないのです。帰りたい、と思いながら、もう一度わたしは唇の動きだけで愛しい人の名を呼ぶのです。

瞬きをゆっくりと何度かして、わたしは窓の外に輝く月を視線の先で追いかけるのです、この瞼が落ちる度に、シャッターみたいにかちりかちりと総てを記録すれば面白いのに、と思いながら。脳の容量が少ないので、すぐに消去されてしまうのでしょうが。

「冗談、痛いのはわたしだって嫌だわ、噛まれたいなんて、そんな野蛮な話」

それも嘘だと言う事は、やはり内緒のままなのです。

噛まれたい、食い千切られたい、噛み砕かれて、死体は時間をかけて朽ちていくように、あまり陽の射さない暗くじめじめとした場所に放置して欲しい、それは愛するあの人に。だけれどひとつだけ、必ずひとくちだけで良いから、わたしの肉を食らってもらうの、血をひと啜り、それから骨を齧って捨てて。

愛してくれなくても良い、それだけを願うのは、何故ならあの人の血となり肉になりたいから。そうすれば一時だけでも、共に過ごせるでしょう、それこそ繋いでも繋いでも溶け合えぬ身体同士を嘆く事も無く。

――嘘、本当は愛されたがっている、嘘でもいいから愛の言葉を、あの薄い唇から聞きたいと願ってしまう。

噛み殺してここで、捨てていくならいっその事に。

血まみれになって噛み殺して、この世からわたしを抹殺したいのなら。

嫌われたく無いわ、憎まれたくも無い、愛されないのなら真逆の感情ででも楔を打つようにあなたの心に食い込んでいたいなんてわたしは望まない、愛されたいだけ、愛してくれないのなら、ここで食い殺せば良い、そしてひとくちだけこの血を。この肉を。この骨

を。
わたし以外にわたし以上、あなたを愛せる人間が居る訳が無いじゃない。
それが怖いのならここで食い殺せば良いわ、その並びの悪い歯で。
あなたの首筋に舌を伸ばしたい、あなたの唇を奪いたい、あなたの指一本一本を唾液で清めましょう、その脇腹に唇を押し付けさせてください、この両腕で抱き締めさせてください、髪に鼻を埋めたらまた太陽の匂いがするのでしょうか、愛しているなどと陳腐な言葉ばかりが零れ落ちるでしょう、今はもう憎悪にまで変化しかけている程の強い強い感情に突き上げられて。
だけれどそれはさせてはいけません、きっとわたしがあなたを食い殺してしまうから。愛しさが募り過ぎた人間心、その深い奥の暗い部分は本当に怖いのです、だから。
指先微かにすら触れさせないで、わたしがどんなに泣きじゃくったとしても。
ただ、今は。
噛んで。
歯形が残るくらいでは足りない、もっと、皮膚が裂けるくらいに、血が噴出すくらいに、骨を砕くくらいに。
噛んで、あなたの印をわたしに残してください、肉も、骨も食い千切って血をすすって、わたしをあなたの糧としてください。わたしはあなたの身体に吸収されて溶けて、そうしたらもう後は一緒に居られる。
それがひと時の夢だったとしても。
焦がれ過ぎてわたしはいつもあなたの顔を忘れます。離れると途端にその輪郭が揺らぐのです。あんなにくちづけても、あんなに指でなぞっても、目も、鼻も、唇も、水槽の向こう側にあるものを覗こうとするかのように揺れてしまう。
「――噛んで、」
わたしの肌よりもずっと高い温度を持って、彼の身体はそこにあ

る。抱きしめられたくて疼くくせに、手を伸ばされると逃げてしまう、捕まえられたくてわたしはあなたから目が離せない、口にすれば感情は形になっても色を失いそうで、結局何も言葉にできないのです。愛の、言葉は。

「もっと腰の肉を絞って、」

薄い唇の端で微笑らしき形を作りながらあなたはわたしの言葉を無視します。

「折れるほど細い腰のほうがいい、抱くなら。それから、髪は黒に戻したほうがいい、お前の白い肌なら」

先日少しだけ茶を入れた髪が気に入らないのでしょうか、思わずごめんなさいと口にしてわたしは項垂れます。彼の気に入らない自分になってしまうことが、一番、許せない。

「――噛んで欲しいか」

「……意地悪、」

「噛んで欲しいなら噛まない」

「どうしてそんな、」

「そう簡単に喜ぶことなんかしてやらないよ」

細い目をますますと細めてあなたは意地悪な光を瞳に宿します。日に焼けた腕を伸ばされるけれど、わたしはそれを払い除ける。彼が意地悪を言うたびにわたしは胸が締め付けられる、甘く辛い痛みが心をぎゅうぎゅうと押し潰す。

「じゃあ食い殺して」

「――へえ、」

そんな殺し文句をどこで覚えてきたんだろう、と彼は冷たく笑うので、それがわたしの本当の願いなんです、と言えないまま俯いてしまう。

あなたは意地悪です。

わたしよりも二十近くも年上で、奥様とふたりの娘さんの父親で、寂しいと泣いてもけしてわたしの都合では会いに来てくれない人。

「お前は俺の玩具だから、」

日に焼けた肌、細く鋭い光を宿した目はけれども少しだけ垂れているので一瞬騙されてしまう。薄い唇。背はそんなに高くないのにとても大きく見えるのは、わたしが彼を好き過ぎるからでしょうか。離れれば輪郭をぼやかせて思い出せなくなるくせに、傍に居ればこんなにも強くわたしを惹きつけて息もさせなくさせる。

「壊すも捨てるも俺次第なんだな」

彼を好きになった理由はもう忘れました、彼に出会ったときの印象も。ただ、そこに在り続けるのはわたしの、行き場のない想いだけ。

「捨てたりしないで、」

「今は、な」

「今も、後もずっと、」

「そんなのは分からないさ」

「嫌、分かって」

約束をして下さい、たとえそれがいつか嘘になったとしても。今は誓ってください、明日反故される言葉だったとしても。

「そんな顔をするな」

彼の伸ばす腕はわたしの腕を引きます。体制を崩して倒れ掛かれば、あなたは受け止めてくれて首筋に鼻先を埋める。わたしは泣きそうになっている。嘘でも約束の言葉が欲しい自分が切なくて。

「あなたが死んだら、わたしはどうすればいいんでしょう」

「おい、勝手に殺すな」

「お葬式の通知もこないわ、知らないままわたしは自分が捨てられたとだけ思って泣いているだけなんだわ」

「死なないから大丈夫だ」

「嘘、嘘だわ」

首筋に熱い息がかかってくすぐったいのを我慢する、あなたの名前を呼ぶ。彼は顔を上げずにくぐもった声にうんと優しい温度を混じらせるから、わたしは泣きそうになって慌ててあなたの髪に触れる、撫でる。

「……わたしは嘘吐きなのだと思う」
どうしたの急に、と運転席から不思議そうな声が掛かります。そうでしょう、唐突に言い出したのですから、おかしな事を言うと思われるでしょう。
「ううん、言う事が端から矛盾していってしまって、もう何を自分で望んでいるのかも良く分からなくなっているのよ」
そういう事は、と少し間が空いて、誰にでも在る事だよ、などと優しげに知ったかのように言われたので、そうかしら、そうよね、と憎々しく思いながらも返事をしました。わたしの胸の内がそう簡単に分かられて堪るものですか。
暗い筈の夜は大きな月に照らされて、空気をびりびりと震わせ輝いています。なんて勿体無い、闇こそわたしの望む、目隠しされたままの世界ですのに。
「愛なんてこの世から無い方が清々して良いでしょうに」
嘘を重ねる事に罪悪感はありません、意味が無いからです、わたしはわたしに対して嘘を塗りたくるだけ。
愛の無い世の中なんて、わたしの罪悪感より意味が無い。
意味が、無い。
「そんなことないよ、愛はあってくれないと」
「何故、」
「僕は君を愛しているからさ」
は、と思わず鼻で笑ってしまったのを男が鏡越しに怪訝そうな顔で見ました。
愛。
そんな、たかが数回寝ただけの男が、わたしに厭われていることも理解できないような男が何を。
身体だけの関係はなんて楽に呼吸が出来るのでしょう。
わたしはこの助手席の男と寝るのでしょう。

空っぽの心を埋めるのは簡単なのです、愛ではなく、それはただひとつの栓で良いのです、愛なんて、そんな窒息物質。愛なんて、そんな腐敗ノ素。愛なんて、わたしの心を枯らしてしまうだけで充分、要らないわ、要らないの、無くした時に慌てふためき自分を無くすくらいなら。

「ねぇ、わたしを噛める？」

「噛む？　歯を立てるって事？」

「お口以外のどこで噛むなんて行為が出来ると言うの」

ねぇ、嘘よ。

わたしはしゃらりと微笑んで、嘘よそんな痛い事望む訳がないじゃあないのと唇を開く。

ねぇ、それは本当だけれど嘘なのよ。

噛んで欲しいのはあの人だけ、噛み殺して欲しいのはあの人にだけ。

抱き締めると太陽の匂いがする、あの人だけよ、あの人だけなの、この心から溢れてゆく感情が愛なのではなかったら、それこそわたしには愛という物が存在しない身体なのでしょう、人生なのでしょう。

それが哀しいのかは、わたしに愛されたいと望む人間だけが決める事ですから。

「月が、大きいのね……」

蜂蜜のようにたらりたらりと流れてゆく川の、もうすぐカーブを曲がれば市街に出てしまうので。

この夜、あなたの腕が抱く女に、わたしは嫉妬しても良いものでしょうか、別の腕を纏う淫乱なわたしが。

「うふふふふ」

「何？」

「いいえ、気持ちの良い夜ね」

愛という感情がなかったとしても、嫉妬は生まれてくる物でしょうか。

ねぇ、ほら大丈夫、胸がこんなに痛いから。
「……どこか、ふたりきりになれる所へ行きましょうか」
あの人と違う煙草の香り、あの人の影ばかりを追いかけていても仕方が無いのだと知っているのです、だから。だから、愛なんて要らない、ただ、ただわたしの肉を血を骨を、摂取して、ほんの少しで良いのだから、そしてわたしはあの人になりたい、こんなに恋焦がれてしまうものなら、わたしにはそれが、至上の愛。
「もう、……待てないから、早く」
嘘は重ねても罪悪感はありません。
空っぽの身体を埋める為の悪戯だったら何も汚れないと信じていられます。
いつかあの人がわたしを食い殺せば良いと望み続けるばかりです。
月の歪なこの夜に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9813l/

骨肉

2010年10月8日14時41分発行